様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２３１３３

研究課題名（和文）イタリアにおける移民のための精神保健：「他者」との出会いの民族誌的研究

研究課題名（英文）Mental Health Care for Migrants in Italy: Ethnographic Studies on Encounter with "Others"

研究代表者
彌吉　惠子（Yayoshi, Keiko）

大阪大学・グローバルイニシアティブ機構・招へい研究員

研究者番号：３０８４６０２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、イタリアで移民に対して適切な精神保健サービスの提供を試みる治療者らが、「他者」としての移民との出会いのなかで、移民とどのように向き合おうとしているのかを、現地調査と文献調査に基づき考察した。診断と治療では、三つの移民の他者性、つまり潜在的なもの、解釈が困難なもの、移民にとって両義的ものに対して、特に注意すべきとされていることから、これらの他者性への配慮に関する治療者らの省察を検討した。イタリアの治療者らは、面談に文化的仲介者などの第三者を介入させ、移民の出身地の治療体系を含む複数の理論の相補的活用を図ることで、移民の他者性の的確な解釈と維持に努めているということが明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
移民の他者性に配慮したサービス提供が試みられる精神保健は、多様性を推進する社会の縮図へと転じている。イタリアの治療者たちが、移民の他者性の的確な解釈を試みながら、どのようにしてその維持も図ろうとしているのかを明らかにした本研究は、移民の同化なき包摂のひとつのあり方を提示するものである。また本研究は、他者理解をめぐる人類学的な議論にたいする治療者らの省察に着目し、実践家による人類学的知見の応用可能性を検討したことで、人類学的知見の深化に資するものともなっている。

研究成果の概要（英文）：This study inquired into how clinicians encounter migrants as "others" through fieldwork and literature review, by focusing on the clinicians intending to provide adequate mental health services to migrants in Italy. Three migrants' otherness, namely something latent, something difficult to interpret and something ambivalent for migrants are supposed to be paid particular attention in diagnosis and treatment, therefore reflections of the clinicians on how to take into consideration these migrants' otherness are examined. The findings showed that, to interpret properly and conserve the migrants' otherness, clinicians in Italy introduce a third person such as cultural mediator into the consulting room and try to make use of multiple theories including healing systems of migrant's homeland in a complementary manner.

研究分野：文化人類学、イタリア地域研究

キーワード：他者性　移民　移住・移動　包摂　イタリアの精神保健

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、移民受入国では、移民にたいしてどのような精神保健サービスを提供するかが課題となっている。往々にして、移民の出身地における心の病いの捉え方と、西洋近代的な精神医学を学んだ治療者たちによる診断や治療の間に食い違いが生じるため、治療者にとって移民の精神障害者は、同胞の精神障害者とは異なる「他者」となっているからである。そこで、いわゆる移民大国の一部の治療者たちは、移民の精神障害者の文化的特性や個々人の特異性といった他者性に着目し、診断や治療の場面において、移民の他者性の人類学的解釈を試みつつ、ホスト社会における移民の暮らしも考慮することで、サービスの適正化を図るようになった。

こうしたアプローチは、特定の地域(旧植民地等)から現在の移住先に直行し定住するような、移民大国の移民にたいしては有効でありえる。だが、昨今一部の国々で急増している、不特定多数の文化圏から流入し、複数の国をまたいで移住を繰り返すような移民にたいしては、常に有効とは言い難い。このような移民の精神障害者は、治療者にとって、心を病んだ異邦人というだけでなく、同じ社会の市民になる見込みの薄い人々となるからである。精神保健サービスの提供の場が、掴み所のない「他者」との出会いの場となったとき、治療者たちは移民とどのように向き合おうとするのであろうか。

現在まで、医療人類学では、移民の精神障害者の定住を前提とした精神保健が主に論じられており、その中心となってきたのが、移民の他者性の解釈に関する議論だといえる。移民の移動性が高まりつつある現在、移民の精神障害者の流動性を前提とした精神保健についても論じていく必要があり、その際、ジェームズ・クリフォードらによる他者性の解釈の限界にまつわる議論との接続が試みられるべきである。

２．研究の目的

そこで本研究では、イタリアにおいて、移民の他者性に配慮した精神保健サービスを提供しようとする治療者らに注目した。精神障害者は往々にして「他者」とみなされ、精神病院に収容されるのだが、イタリアでは精神障害者は一市民として地域社会に包摂されている。さらに、欧州の玄関口であるイタリアの移民は、旧植民地の出身者が多いフランスや英国などの移民とは異なり、世界各地から流入し文化的に極めて多様であるため、それぞれの移民の文化について学んだうえで、その他者性を的確に解釈するという前提が成り立ちにくくなっているのである。イタリアの治療者たちは、移民の他者性を適切に取り扱うことで移民の同化を回避しつつ、地域社会に包摂しなければならないのである。

では、イタリアの治療者たちは、①どのような移民の他者性に特に注意を払い、②どのような指針を拠り所として、③どのようにして他者性の的確な解釈や取り扱いを図っているのであろうか。本研究では、イタリアの治療者たちによる他者性の取り扱いに関する省察を検討しながら以上の 3 点を明らかにし、移民という「他者」との出会いのひとつのあり方を詳にすることにした。

３．研究の方法

本研究では、現地調査と文献研究、データ分析に用いる理論的視座の検討を行った。

(1)現地調査

調査の対象は、移民の集住地域や難民収容所を数多く擁するミラノ市、ローマ市、ピサ市において、移民の精神障害者に精神保健サービスを提供している計 45 名の精神科医と心理士とした。各人にたいして、移民の精神障害者の事例に関する半構造化インタビューを実施するとともに、彼らが所属する医療機関や心理士養成校、関連のセミナー、事例検討会、研修会などでは参与観察も行った。なお、2019 年度の時点で、2016 年 11 月から断続的に行ってきた現地調査はほぼ終了していたため、補助事業期間中は、2020 年 2 月にローマ市で開催された治療者を対象とした研修会などの参与観察を行うのみにとどまった。

(2)文献研究

イタリアへの移民の流入は、旧植民地からの移民が多い英国やフランスなどに比べて遅れてはじまったことから、イタリアの治療者らの間では、移民に対する精神保健サービスに関するノウハウが十分に蓄積されていないという認識がある。そこで、移民の他者性の解釈を試みる治療者たちは、移民大国で移民に精神保健サービスを提供する精神科医や心理士らの著作や、伝統医療をとりあげた民族誌を「参考書」として活用している。本研究では、研究の対象となった治療者らの多くが注目する、フランスの精神分析家・臨床心理士であるトビ・ナタンと、イタリアの民族誌家であるエルネスト・デ・マルティーノによる著作、および、そうした著作で提唱されている思想・概念をとりあげ、自らの経験をふまえて議論を展開しているイタリアの治療者らによる著作を研究の対象とした。そうすることで、「参考書」で提唱される思想・概念がどのように解釈され、指針として活かされようとしているのかを検討した。

(3)理論的視座の構築
　データの分析に用いる理論的視座を構築するために、移民大国の治療者たちが、移民の他者性をどのように取り扱っているのかを、精神医学と精神分析、文化精神医学という治療思想別に検討した。さらに、『無為の共同体』（1999）におけるジャン＝リュック・ナンシーによる論考を参考にしながら、ジェームズ・クリフォードやレナート・ロサルド、ヴィンセント・クラパンザーノなどにより他者性の記述をめぐって展開されてきた議論を整理した。

４．研究成果
(1)研究の主な成果
①注意が必要とされている他者性
　イタリアの治療者たちが、特に注意を払っているといえる移民の他者性とは、第一に移住・移動の経験という移民にとって両義的な特異性、第二に移民の出身地の伝統医療に代表されるような解釈が困難な文化的特性、第三に移民や治療者にとって当たり前のことであるからこそ看過されやすい潜在的な両者の差異である。なお、イタリアの治療者の間では、移住・移動の経験と心の病いを必要以上に関連づける傾向が強いことが確認できた。
②診断と治療の場面で拠り所とされている指針
　民族誌家エルネスト・デ・マルティーノの思想からは、歴史過程の諸関係のなかで移民の他者性を解釈しつつ、西洋近代的な精神医療の文化的特性に気づくことで、精神医療そのもののあり方を見直すという指針が導出されているといえる。かわって、精神分析家・臨床心理士トビ・ナタンの治療思想からは、解釈が困難な他者性を取り扱う際は、第三者にも解釈を委ね、適切と考えられる場合は、他者性を解らないものとして留めおくという指針が導出されているといえる。
　以上の研究成果は、2 本の論文として発表した。
③他者性の解釈の仕方と取り扱い方
　イタリアの治療者たちは、文化的仲介者のような第三者を面談で積極的に活用する。第三者と移民のやり取りを観察したり、通訳における表現に注意を払ったりすることで、治療者たちは、潜在的な移民の他者性の顕在化に努めている。また、解釈が困難な他者性を取り扱う際には、第三者にたいして、その解釈を委ねたり、解釈の不可能性の明示を求めたりすることが有効だと考えていることが明らかにできた。
　かわって、心の病いの解釈を試みる場面で、移民にとって両義的な他者性を考慮するか否か判断する場合、あるいは解釈が困難な他者性の考慮を試みる場合、治療者たちは、移民の出身地のものを含むあらゆる理論を有効なものとみなして相補的に用いようとしていることを明らかにした。その一方で、イタリアでは学派間で競争があることから、異なる学派の治療者が構築した理論を有効なものとみなし、活用するという取り組みは進んでいないことも指摘した。
　なお難民の精神障害者の高い移動性にできる限り対応しようとする治療者たちは、昨今、難民の間で必需品として普及している携帯電話に注目していることが確認できた。治療が中断することも少なくない難民との、SNS をとおした交流という形で提供が試みられるのは、モニタリングとしてのケアだといえる。
　以上の研究成果は、IUAES、EASA、および研究に参加した治療者たちを交えたオンラインでの研究会において発表を行ったほか、論文としても公表した。

(2)成果の国内外における位置付けとインパクト
　移民の他者性の解釈を前提とした精神保健を論じる、国際的に影響力のある医療人類学的な研究では、解釈が困難な他者性に関しては、解釈を断念する必要性について主に言及がなされるのみであった。そのようななか、本研究では、これまで移民を対象とした精神保健と関連づけられることが殆どなかった、クリフォードらによる他者性の解釈の限界にまつわる議論に照らし合わせながら、他者性の取り扱いに関するイタリアの治療者たちの省察を検討することで、移民の他者性の解釈を前提としない精神保健を論じるための理論的枠組みを提供した。
　一方、イタリアの精神保健を取り上げた国内の研究では、地域精神保健制度が精神障害者を社会に包摂する制度として論じられることが多い。本研究では、精神障害者の社会性をめぐって生じた 1978 年の論争を、2014 年に報道された難民の自殺事件をとおして再考することで、地域精神保健制度では、移民の同化を促す可能性が排除しきれず、それが同化できない移民の排除につながりうるという指摘をした。この研究成果は、多文化共生社会を目指す我が国における、精神障害者に対応した地域包括ケアシステムの構築に資するものとなっている。
　なお、研究成果の社会還元を図るため、研究に参加したイタリアの治療者たちを主な対象とした、オンラインでの研究発表や研究会を行なった。これは、学派の垣根を超えた交流が殆どないイタリアの治療者たちが、他の学派の治療者たちの試みについて学ぶ機会にもなったと考える。

(3)今後の展望
　携帯電話をはじめとする通信技術の発達により、移民が家族や母国とのつながりを維持しやすくなったことから、移住・移動の経験のありかたが変容しつつあることが治療者らの語りにより示唆された。そこで、新型コロナウイルス感染症の感染拡大・蔓延期における移住・移動の経

験と通信技術の相互作用に着目した研究を、サガラ学院所属の臨床心理士レベッカ・ファルージ氏とともに開始した。この研究は、情報通信機器の普及拡大により、移住・移動の経験と心の病いを関連づける複数の理論が覆されつつある今日、治療者らが移民の病いの解釈を試みるさいの手がかりを提供しうる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 彌吉惠子	４．巻 Vol.20, no.2
２．論文標題 精神保健におけるメディエーターの役割：イタリアの精神科医と心理士の理念に着目して	５．発行年 2021年
３．雑誌名 こころと文化	６．最初と最後の頁 180-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 彌吉 惠子	４．巻 30
２．論文標題 デ・マルティーノを読む治療者たち：移民のための精神保健におけるイタリアの思想	５．発行年 2020年
３．雑誌名 保健医療社会学論集	６．最初と最後の頁 44～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.30.2_44	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 彌吉 惠子	４．巻 22
２．論文標題 ナタンを読み解く治療者たち：イタリアにおける民族精神医学の政治的含意と臨床	５．発行年 2020年
３．雑誌名 アジア太平洋論叢	６．最初と最後の頁 3～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32312/transasiapacific.22.0_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Keiko Yayoshi
２．発表標題 Addressing Cultural Differences in Mental Health Services: Focusing on the Narratives of Psychiatrists and Psychologists in Italy
３．学会等名 IUAES 2021 Yucatan Congress（国際学会）
４．発表年 2021年～2022年

１．発表者名 Keiko Yayoshi
２．発表標題 Mobile Phone as Refugees' Mental Health Care Device: Focusing on Narratives of Italian Psychiatrists and Psychologists
３．学会等名 European Association of Social Anthropologists 2020 Lisboa（国際学会）
４．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 彌吉惠子
２．発表標題 複数の言説をとりいれた移民のための精神保健：イタリアの精神科医と心理士の語りを中心に
３．学会等名 第46回日本保健医療社会学会大会
４．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 彌吉惠子
２．発表標題 イタリアの精神保健におけるメディエーター：イタリアの精神科医と心理士の理念に着目して
３．学会等名 多文化間精神医学会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 彌吉惠子
２．発表標題 イタリアにおける難民の精神保健：精神科医と心理士の語りに着目して
３．学会等名 移民政策学会
４．発表年 2019年～2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関